黒い壺

井伏鱒二著

昭和名作選 6

新潮社版

井伏鱒二著

黒い壺

新潮社版

昭和名作選

黒い壺

昭和二十九年十二月二十四日　印刷
昭和二十九年十二月二十八日　發行

定價　貳百參拾圓
地方賣價　貳百四拾圓

著者　井伏鱒二

發行者　東京都新宿區矢來町七一
佐藤義夫

發行所　東京都新宿區矢來町七一
株式會社　新潮社
電話東京三四局代表七一一一(八)
振替　東京八〇八番

亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

印刷　扶桑印刷株式會社　製本　新宿　加藤製本所
Printed in Japan

目次

艶書　三
黒い壺　二一
野邊地の睦五郎略傳　三七
晩春の旅　五三
犠牲　六九
比波良の漁師　八五
丑寅爺さん　一〇五
遙拜隊長　一二九

鳥の巣　一五九
眼鏡　一六七
爺さん婆さん　一八三
薬師堂前　一九五
虎松日誌　二一一
二つの話　二三七

解説　中村光夫

装幀　山田申吾
口絵寫眞撮影　田沼武能

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

艷

書

榎町通りの仙果堂といふ骨董屋は、主として古い陶器を扱つてゐる。飾窓には、非賣品の信樂の大壺と、高さ五尺ちかくの埴輪の馬を置いてゐる。

この店の常連客となつてゐた一人に、ヴィリシーン氏といつて日本語の凄く上手な外人がゐた。わづか一年あまりの間に可成りの點數を買ひとつた。最初、この客は浴衣がけで靴下に下駄をはいてやつて來たが、店に足を入れるとすぐに硝子ケースのなかのグイ呑に目をとめた。これが黄瀬戸の六角型のグイ呑である。五つ完全に揃つてゐて、天正初期ごろのものと思はれるのに丹礬が濃く瑠璃色に現れてゐた。たいていの客はこの品物の値段をきくと買ひたいのを諦めるが、ヴィリシーン氏は初めから財布の紐をゆるめてかかつてゐるやうであつた。

「骨董屋さん、この黄色い陶器、私の宿まで屆けて下さいね。私、京都の町を夕涼みの散歩のところです。ここに財布を持ちません。」

上手な日本語でさう云つた。

「でもお客さん、それは黄瀬戸どすさかいに。一と口に、黄色い陶器と云うても、黄南京なんかとは違ひますのどつせ。――ともかく、ちやんとした黄瀬戸のグイ呑どすさかいに。」

仙果堂主人は硝子ケースからそれを取りだして、勿體つけて見せる手つきで毛氈の上に並べた。

「お客さん、いつぺんここ見ておくれやす。」と仙果堂は、その一つの内側を客に見せた。

「藥が垂れて、ここの盛りあがつてゐるところ——ここ見ておくれやす、冴え返つてますから。しかも天正の初期、といふ鑑定でございますからね。」
「おお、素晴しい丹礬ね。これ、土中品でしたね。」と外人客は電氣の明りに見せながら云つた。「天正の初期と云へば、黄瀨戸としても古い方ですね。おお、土もカチカチに乾いた感じ。」
「お客さん、元龜・天正と云うたら、今から大體のところ、フォア・ハンドレッド・イヤーズ・アゴー、どすさかいに。」
たいていの外人客はどんな品物を見ても年數をたづねるので、仙果堂も年數だけは英語で話すことを心得てゐる。
「元龜・天正。」と、その外人客は、ふところから取りだした小型の年表をめくりながら云つた。「天正の初期ならばですね、大體におきまして、三百八十年前、中國では、神宗の萬曆年間ですね。はい、わかりました。」
外人客は年表をふところに入れ、「では、宿まで屆けて下さい。」と無造作に云つた。値段を知らされても默つて頷くだけであつた。
仙果堂は近頃の外人を信用しないので、店番を女房に任せ、小僧をつれて宿屋まで外人のお供をした。案ずるまでもなく、外人は品物と引換へに代金を拂つてくれた。
それから一箇月ばかりたつと、その外人が今度は自分で運轉する自動車でやつて來て、いま京都のお寺見物に來た歸りだと云つた。そのとき、店の硝子ケースのなかには、この前のグイ呑のあつた位置に、田舍で仕入れて來た姫谷燒の小皿が一つ置いてあつた。楓の葉を一枚、赤一色で描いた小皿である。
「おお、可愛らしい手鹽皿ね。」と外人は、その小皿に目をとめた。「この可愛らしさ、紅葉の葉が、

このお手鹽皿を可愛らしく見せるでせうか。皿それ自身の姿が可愛らしいでせうか。これ、古九谷と違ひますか。」
「お客はん、姫谷燒どす。地方的なものどすけれど、何や田舍娘のやうなおもむきがしますなあ。」
「田舍娘に譬へるなら、鄙に稀れな田舍娘ね。私、これ買ひます。」
外人客は代金を拂ふと、その小皿を大事さうに上著の內ポケットに入れて上から撫でながら、
「この鄙稀れ娘は、時代は、いつごろでせうね。江戸の中期、それよりも少し前でせうか。」
「さあ、それがお客はん、さう云うたところどすなあ。」
外人はいたづらさうに微笑を見せながら、
「すると、先づ、ツー・ハンドレッド・イヤーズ・アゴー、の程度でせうね。では、また參ります。」
さう云つて、輕く仙果堂を赤面させてから店を出て行つた。まるで、この店の空氣までも買ひとつて行つたやうな感じであつた。
その後、この外人客は月に一度か二度ぐらゐ來るやうになつたので、だんだんと大體の素姓が仙果堂にもわかつて來た。名前はボター・・ヴィリシーンと云ひ、京阪方面に住んで外國資本の會社の營業面を擔當してゐるらしかつた。京都へ來るのは自分の好きで古美術品を買ふためと、ほかには日本の業者の招待で舞妓を見たり日本の企業家と商談したりするためでのやうであつた。そのつど木屋町の旅館に泊つてゐる。いはゆる純日本風の生活に觸れるやうに心がけてゐたものと見える。
仙果堂は早いところヴィリシーン氏の嗜好を呑みこんでしまつた。赤繪とか九谷とか伊萬里とか、それも古雅な色彩のものをこの外人客は好いてゐるが、いまに日本の無釉陶器の味を眞底から好きにならうと心がけてゐるやうであつた。その證據には、あるとき古伊賀の壺を見てかう云つた。
「私、この手の陶器の味はひ、日本人のやうに心の底からわかりません。とてもとても、一朝一夕で

は駄目ですね。それ故に私、このごろ日本風の品物をつくる業者の家をのぞきます。一昨日も、名古屋へ行つたついでに、提燈つくる業者の家をのぞきました。先づ、提燈の美しさなどからして、日本人のやうに心の底から美しいと感じたいと思ひます。」

ひまも金もある身分に違ひない。ヴィリシーン氏の話では、下駄をつくる家や雨傘をつくる家なども、もう幾度ものぞいて見たさうである。廣島見物に行つたついでには、一村こぞつて縫物針をつくつてゐる田舍に行つてみた。その村の、ある一軒の家で、雨だれの落ちるところに伊萬里の壺の毀れたのが棄ててあるのを見た。その部落から海岸の方へ出る途中、細い水藻のそよいでゐる小川の洗ひ場の下に、よく煮賣屋で煮〆など盛つてゐるやうな大型の平皿が水に沈めてあつた。よく見ると、これが鐵砂で水草を描いた唐津の皿であつた。そよぐ綠色の水藻と、鐵砂の水草が見事な對照を見せてゐた。その無心の演出の效果を心憎いと思つたさうである。

「そしたら、その平皿、お買ひやしたんどすか。」

と仙果堂がきくと、

「いえ、素通りして來ました。もし買つたとしたら、話にしても餘情が消えますね。」

とヴィリシーン氏が云つた。

仙果堂はこの客の好きさうな商品を、いつも硝子ケースのなかのまんなかに置くことにきめてゐた。この客が最初に來て買つた黃瀨戸のグイ呑を置いてゐた位置である。二度目に來たときにも、そのあとへ並べておいた鄙稀れ娘の小皿を買つて行つたので、仙果堂としては緣起をかつぐ意味もあつた。それにヴィリシーン氏は店に來ても、ほかの客がゐると硝子ケースのなかを見るだけで、何も云はずに歸つて行くことがあつた。同好の先客を大先輩として扱ふといつたやうな素振である。ところが、こんな內氣のやうな外人が、骨董では大先輩である筈の仙果堂主人に、他愛ないことだが厄介な

話を持ちだした。

いつぞや仙果堂はヴィリシーン氏に、知りあひの願法寺といふ田舎の寺の次男が、その宗旨の本山の附屬學院に入學したと四方山ばなしで云つたことがある。ヴィリシーン氏はこの話を覺えてゐて、仙果堂にその學院へ妙な用事で使者に立つてくれと云つた。

これには仙果堂も當惑した。願法寺といふ寺は、相當格式のある寺だが住持が病氣がちで、長男が東京の大學に在學してゐるので學資金の工面に住職も頭を惱ましてゐる。仙果堂としてはこれが附目である。一箇月おきぐらゐに願法寺へ骨董を仕入れに出かけて行き、住職の口添で檀家やその近村の舊家の骨董も買ひ集めて來る。いはば願法寺は大事な仕入先または仕入れの根據地といふべきである。この寺の次男が本山の學院に入學するときには、仙果堂は保護者代理と保證人の身分で入學式にも列席した。毎月初日には、本山にお詣りして阿彌陀堂を拜み、學院の寮にゐる願法寺の倅の御機嫌を伺つて來る。これも己の商法を大事にするためで、本山詣での御利生は覿面であつた。願法寺の住持も檀家の衆も骨董捜しに身を入れて、これこれしかじかの骨董を見つけたが、どんなものだらうと拙い圖入りの手紙などよこすやうになつた。一度は手紙による通信取引で古染附の中皿を取りよせて、それを「願法寺もの」と稱してヴィリシーン氏に賣りつけたこともある。しかし甘い汁の次には苦い汁の譬へもある。諺通り、ヴィリシーン氏が無理な註文を出した。

「私、自分の醜い欲望を美化して話すつもりはありません。」とヴィリシーン氏は云つた。「これは、本能的な欲望です。私、自分に尼僧を好きになつたこと、それから自分がその尼僧に近づきたいこと、それは自分が日本人の實態を究めたいためであるとは申しません。骨董と違ひます。でも私、その尼僧を心から愛します。」

「さうどすなあ、あんたはん、學院の尼はんは、尼僧とは云うても學院生どすさかいに。なんぼ私が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

骨董屋と云うても、どうも云へまへんなあ。これが奥さんとしてお貰ひやすのどしたら、また他の筋からお話もしますけれど。」
「よくわかります。私、その尼さんを奥さんとしてでなく、ローカル・ワイフとして所望します。のちのちのことは云へません。いまの私の氣持、それです。」
「それやつたら、あきまへんやろなあ。」と仙果堂は、溜息と共に腕組をした。「ローカル・ワイフとお云ひやしても、やつぱり二號はんどすさかいなあ。尼はんを二號はんにするのは、近頃の流行どすかなあ。どこかの尼はんが、洋髪の鬘を著て、男と一緒に遠出をしたと、すつぱ抜きがこの前も新聞に出てました。」
「流行なら、よくない流行と思ひます。でも私、あの學生さんの尼僧を、心から好きになりました。たまらなく好きになりました。」
ヴィリシーン氏は年甲斐もなく涙ぐんでゐた。氣まぐれや冗談ごとでないのは明らかだが、いはば垣間見てぞつこん惚れるといふのは、昔の講談や情話などに出る話に近い。
「あんたはん、さう云ははりますけど、まだ交際もせんうちに、そんなこと云ははるのが、をかしおすなあ。そのときの何かの加減で、一時の、氣まぐれどすやろ。」
「いえ、決して氣まぐれとは思ひません。これが迷ひならば、覺めよかし、と嘆き悲しむ日本の歌がありますね。私、ほんとにその思ひです。」
ぬけぬけと吐かすのを聞かされてゐるやうなものであつた。
ヴィリシーン氏はその前の休日に、自動車を自分で操縦して宇治の黄檗山へ普茶料理を食べに行つたさうである。それから平等院へ行く途中、道ばたにゐた男女三人づれの若い坊さんに醍醐寺の所在をたづねると、若い尼さんが、醍醐寺の方角は全然ちがつてゐると親切に教へてくれた。この三人法

師は、今から醍醐寺へ案内してもいいと云つたので、ヴィリシーン氏は三人を車に乘せて醍醐寺へ行き、そこから三人の歸る本山の前まで車で送りとどけて來た。

無論、この遊行の途次、若い尼さんの名前も教はつた。佛教と人生について三人の意見もきかされた。日本の佛教に及ぼしたキリシタン宗の影響について、それが意外にすさまじいものであつたことも例證をあげてきかされた。そのとき若い尼さんは、日本語で話すのに必要以上に英語を取り入れたが、その間違ひだらけの發音に無上の魅力がこもつてゐた。實際、うつとりさせられてしまつたとヴィリシーン氏は告白した。何としてもその尼僧と交歡したいので、仙果堂が學寮へ行つたときその尼僧に連絡してくれと云ふのである。こんな厚かましいのは見たこともない。

「つきましては、骨董屋さん、これをあの尼僧にお渡し下さい。お願ひです。」

ヴィリシーン氏は、ポケットから封書を取りだした。

「あの尼僧の學寮には、舊弊な嚴しい學監がゐるといふことでした。學生に來る手紙、いちいち調べるといふことでした。私、貴方を他にして誰に賴むことも出來ません。」

「あんたはん、さうどすけど、他に何か、別途の手蔓おへんか。」

「いえ、私、この國の業者の人々にはお願ひ出來ません。それには、いろいろ理由がございます。貴方ひとりが手蔓です。この手紙、親展です。ここに置きます。どうか賴みます。」

ヴィリシーン氏は封筒を毛氈の上に置くと、さすがに面目なささうに顏を伏せて店を出て行つた。

仙果堂は腐りきつてゐた。封筒は昔の女學生などのよく使つてゐた派手な模樣入りの代物である。上書きはローマ字で書いてあつた。いくら若い女に送る艶書とはいへ、黃瀨戸や萬曆赤繪と取組んで來た人の趣味とは思へない。どこで見つけたものか、近頃こんな艶めかしい封筒を捜し出したことが不思議である。

仙果堂がその封筒の赤い百合の花の模様を見てゐると、仕切の奥から女房が聲をかけた。
「あんた、ヴィリシーンはんが、かはいさうに、しよぼんとして歸らはつたわ。わたし、あの人がかはいさうで、裏口から出て行つて覗いて見てた。」
「お前、いま外國の氣じるしの云うたこと、きいてゐたか。藪から棒に、前代未聞の御用命だ。ほんまに胸くそが悪い。」
「あんた、そんな固いことばつかり云はんと、粹に碎けたげたらどうどすの。案外、尼はんの方も、氣があるのと違ひますか。」
「阿呆、云ふな。これが金の茶釜、千鳥の香合を捜せとの御註文なら、仕様がないけど。御用命、かしこまつて承はつても、骨董屋として恥やないやろ。しかし、それとこれとは話が別だ。」
「ほしたら、尼はんには、わたしがその手紙、ことづけたげようか。きれいな尼はんやろなあ。」
「ばかなこと云うな。きれいかどうかしらんが、お前が持つて行くことは、なほさらいかん。」
仙果堂は女房の出しやばりを警戒して、ヴィリシーン氏の艶書を印傳の合切袋のなかにしまつた。いつも仙果堂は、店にゐるときにはこの合切袋を抽斗に入れて錠をかけておく。所用で外に出るときには手にさげてゐる。
この手紙に關する限り、仙果堂は女房に一さい口を出させないやうに氣をくばつた。幇間の骨董屋と云はれるのがおそろしい。夕飯のときにも、女房が尼さんの名前をたづねたが、仙果堂は「人の色戀のこと、氣になるのか。えい年をして何ごとだ。」と一言のもとに叱りつけた。それでも女房は、自分たち夫婦には子供もなくて淋しいと云つた。人さまが、色戀で浮身をやつしてゐる話をきくと、何か口出しをしてみたくなると云つた。
「それがお前の悪い癖だ。婆さん根性、まる出しやないか。相手は、本山の學問僧だ。しかも、若い

尼はんだ。」
　と仙果堂がたしなめると、
「さう云うたかて、きれいな尼はんやつたら、勿體ないやうな氣がするわ。なんぼ人の色戀と云うても。」
　女房は、むしろ上の空のやうに云つた。
　仙果堂が、むつとして口をきかないでゐると、
「でも、その尼はん、眼鏡かけたはらへんやろか。ひよつとしたら、もしそんなんやつたら、どうでもええわ。」
　と女房が話に區切りをつけた。
　ヴィリシーン氏は、それから一週間たつても二週間たつても姿を見せなかつた。仙果堂は定期の仕入れで旅に出て、願法寺の世話で茶入や壺など買つて來たが、その留守中、ヴィリシーン氏は一度も來なかつたと女房が云つた。
「きつとヴィリシーンはん、恥づかしいのんやで。しかし今日は、交換クラブの市に間に合うてよかつた。ついでに行つて來るぜ。」
　仙果堂は女房にさう云つて、旅から持つて歸つた風呂敷包みをそのまま交換クラブに持つて行つた。十五人ばかりの會員が、それぞれ持參の骨董を廣間の壁の根に沿うて並べてゐるところであつた。仙果堂も並べ終つて下見に取りかかると、碌々亭といふ骨董商の出品のなかに、見覺えのある品物が二點あつた。繪織部の角皿と黃瀨戸のグイ呑で、二點とも仙果堂からヴィリシーン氏に賣つたものである。グイ呑は五つ揃つて賣つたうち、裏に細く燒罅の見えるのが一つだけ出してあつた。
「おや、これは懷しい對面やなあ。」

しかし骨董を扱つてゐる商人には、商品とこんな巡りあはせをすることは珍しくない。ただ、これをヴィリシーン氏が、手放したといふのが妙なものであつた。

「ちよつと碌々亭さん。このグイ呑のことどすがね。さる外人から、これ買ははつたのと違ひますか。」

「仙果堂はん、圖星。」と碌々亭が膝を打つた。「その外人のひと、大阪の親店のお得意さんだした。今度、お國へ歸らはりますよつて、うちの親店で大賣立しはりました。」

「いつ、お國へ歸らはります。」

「せんだつて、神戸から立ちはりました。」

碌々亭の話によると、ヴィリシーン氏は急に尾羽打ち枯らすやうな始末になつて、日本を立ち退いて行つたさうである。確かなことは知れないが、ヴィリシーン氏は東南アジア方面の植民地の生れである。國籍は二つ持つてゐたが、元來が根無草のやうな人で、何かのことで今度、一トたまりもなく失墜したものらしい。でも碌々亭は、「わたし、具體的なこと、なんにも知らしまへん。」と話を端折つた。お互に大事なお得意さんの沒落を見守るのは嫌やなもので、仙果堂もそれ以上のことはこの話に觸れなかつた。

交換クラブで市が立つのは毎月末日である。その翌日の、翌月一日も仙果堂にとつては月例行事の日に當る。すなはち、願法寺の倅に御機嫌伺ひのため本山の學寮を訪ね、ついでに阿彌陀堂を拜禮して來ることになつてゐる。

願法寺の倅は、ほんのまだ子供で、學院普通部の一年生である。背が低いので豆小僧といふ仇名をつけられてゐる。ここの學院では、普通部と高等部の二つに分れてゐて、普通部には中學卒業の者が入學する。二年で修了する。高等部には、高等學校卒業以上の學歴の者が入學する。これも二年で修

了だが、ここを卒業した者には一人前の僧侶としての資格が與へられる。學院生のうちには、たまたま大學を卒業して來た者もゐる。これは高等部二年の課程を一年間で終へることになつてゐる。ほかにもまだ、俗間の會社づとめを縮尻つたり失業したりして、發心してこの學院に入學した三十歳前後の者も三、四人ゐる。こんなのは年をくつてゐるので經文を覺えるのに苦勞する。所詮は駄目だと諦めて、暮夜ひそかに寮を拔け出て町の居酒屋へ酒を飲みに行くのもある。それと反對に、ひまさへあれば阿彌陀堂へお籠りして一心不亂にお經を誦んでゐるのもある。一概には云へないのである。

女子の學院生は、普通部と高等部を通じて全部で五人しかゐない。男子の學院生と同樣に、頭を丸め墨染の衣をきて袈裟をかけ、腕には數珠をはめてゐる。だから姿は一般の尼僧と變らない。普通部一年の女子學生など、だぶだぶの衣をきてゐたり衣にあげをしてゐたりして傍の見る目もいぢらしい。本山詣での人たちが、こんな女子學生や男子學生の雛僧を目にとめて微笑を浮かべてゐるのを見かけることがある。

仙果堂は月例の本山詣でにも、やはり印傳の合切袋を身につけて行く。今度は、これが非常に惡い結果をもたらした。仙果堂の口眞似によると、「大きな大きな大縮尻」であつた。願法寺さんへ顏向けもならぬ大縮尻であつた。

この合切袋は、運惡くヴィリシーン氏の艶書を入れたままになつてゐた。すでにヴィリシーン氏は日本を去つて行つたので、仙果堂に艶書を取次いでもらひたいといふ註文は未然に解消したわけであつた。仙果堂としては、艶書のことなど問題でなくなるのが當然である。願法寺の雛僧に面會のため、本山の事務所の受附に名刺を出したとき、つい迂闊にハンカチと共に艶書を合切袋から取りだして、取り落したものと見える。仙果堂はそれに氣がつかないで、面會室に案內されて願法寺の雛僧に會つた。その部屋の柱時計を見ると、學院生の夕食時間までにまだ餘程の時間があつたので、一緒に阿彌

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com